

平成23年3月4日

神戸大学ブリュッセルオフィスオープニングシンポジウムにおける
ヘルマン ヴァンロンパイ欧州理事会議長の挨拶
(日本語訳)

初めに、とてもシンプルな言葉で私のスピーチを始めたいと思います。政治の世界ではあまり使われることがないかもしれませんが、それは、「Thank you」という言葉です。日本語にも挑戦してみましょうか。「どうもありがとう！」

私は、このような名誉を与えてくださったことを神戸大学に心から感謝したいと思いません。大変光栄に存じます。そして学長、あなたの優しさにあふれた寛大な言葉にも感謝いたします。

私がこのような名誉に値するかどうか分かりません。しかし、万が一そうでないとしても、私のEU大統領としての任期が終わりオフィスを去るときには、その名誉に値すると確信が持てるよう、残る任期の間に努力いたしたいと存じます。(その場合は、あなたがたは将来に向けた確実な投資をしたということになります！)

私は、欧州連合と日本の関係に活力を与えることが重要であると考えております。私たちは全てのレベルにおいて、すなわち政治的にも、経済的にも、そして私たちの市民社会および大学の関係においても、それを目標にすべきだと思います。

昨年4月に日本を訪れたときにも申し上げましたが、私は、EUと日本の関係をとても重要視しております。ヨーロッパ側も日本側も、その潜在的な可能性を過小評価する傾向があるのかもしれませんが。だからこそ、あなたがた神戸大学が行っていることが非常に重要なのです。実際、神戸大学のヨーロッパアンセンターは、日本の大学がブリュッセルに開設した初の海外オフィスです。私はそのことに対してお祝いを申し上げたいと思います。ヨーロッパアンセンターを開設することで、あなたがたは、私たちとの関係に新たなハブを作ってくれました。私たち二つの社会をつなぐあらゆる糸を結ぶ、新たな強い結び目です。

世界の政治的な変化、すなわち中国、インドおよびその他新興経済国の台頭が、私たち

EUと日本に影響を及ぼしています。それは、政治的な地勢図、たとえば私たちそれぞれのアメリカ合衆国との関係にも変化をもたらしています。しかしながら、強い絆から、従来にも増して大きな利益を得ることも可能です。そして、それが私たちの繁栄の鍵であることに変わりありません。

昨年4月に東京で行われた日・EU首脳会議は、私にとって、2010年に行われた国際会議の中で最も興味深いもののひとつでした。俳句へのインスピレーションを得られたからだけではありません。

天皇陛下や当時の鳩山首相にお目にかかれたのは光栄なことでした。その後に行われた二つのG20の会議では、菅直人首相にお会いしました。年内にブリュッセルで開催されるEU-日首脳会議に首相をお迎えできることを楽しみにしております。欧州理事会を代表して、強いメッセージをお届けできることを期待しています。

皆様の中には、ブリュッセルの組織の複雑さをよくご存じない方もいらっしゃると思います。外部の方には理解するのが難しいということもよく分かっております。しかし、それはワシントンや東京の政治の世界でも同様でありましょう。複雑さは、独裁政治を除いてほとんどすべての統治システムの特徴といえます。EUの戦略母体と考えられているのは、27名の国家元首や首脳で構成される欧州理事会です。

これが、私たちの仕事が、欧州委員会や欧州議会、欧州理事会が日常的に行っていることと大きく異なる所以です。つまり、法案を5億人の市民と何百万の法人のために立法化するということです。

欧州理事会の仕事をより一般的かつ政治的な性質から言うならば、方向を決定し、道筋を定めることです。われわれはどこに向かうのか？今までの経験から申しますと、27名の国家元首や首相を同じ方向に向かわせるのは容易なことではありません。

それにもかかわらず、私たちは成功を収めました。27名すべてが、私たちが共に属し共に働かなければならないという信念を共有しています。それは経済問題のみにとどまらず、最近のアラブ世界での出来事への対応においても同様です。そしてまた、日本との関係に対する見方についても同じことが言えます。

私は先に、政治、経済、そして社会的接点という観点から、EUと日本の関係を強化すべきと申し上げました。

この3つの課題について、順に一言ずつ述べさせていただきたいと思います。

まずは政治的な面についてです。先に申し上げましたとおり、私たちには多くの共通点があります。日本は平和を愛する国です。あなたがたは1945年以降、まったく武力を行使したことがありません。旧来型のパワーゲームが再び現れている地域において、日本は安定した力となっています。

EUも日本も、国際舞台においてより強力な役割を担うことを目指しています。しかしながら、政治的な課題における私たちの連携は、そのあるべき姿にはまだほど遠い状態です。私たちが一緒にできることがあるはずです。アフガニスタンでの警察訓練やソマリア沿岸の海賊対策で既に協力していることが良い例です。テロ対策あるいは不拡散の問題に協力して取り組むことを考えてみてください。

災害救援もそのひとつです。この分野においては、例えば2010年に発生したハイチ地震やパキスタンの洪水の後に日本が取った救援活動に対し、ヨーロッパは興味を持って注目しています。だからこそ、先月提出された災害救援分野における日・EUの連携に関する日本の提案、いわゆる「ウエタ - イニシアチブ」を高く評価しているのです。

二つ目の点は、どのようにして私たちの経済関係を強化するかということです。今日の変貌する世界において、お互いの政治的な結び付きを活性化させたとしても、貿易 - 純粋な貿易 - が私たちの関係を支える重要な要素であることに変わりはないでしょう。私たち二つのブロック間の貿易を強化するための明らかな方法は、自由貿易協定ではないでしょうか。

EUは、日本が自由貿易協定の交渉を開始することに強い関心を示していることを承知しています。私は、自由貿易協定はヨーロッパの企業や消費者にとっても同様に興味深いことであると思います。

現在、高官レベルにおいて、可能性の検討がなされているところです。したがって、自由貿易協定に向けた作業が開始される可能性に関して、次の首脳会議におけるEUの立場を述べるにはまだ早すぎます。

しかしながら、現段階で、二つの一般的見地を申し述べることができます。つまり、そのような貿易関係の改善は包括的かつバランスの取れたものであるべきだということです。包括的という意味は、全般的な政治的関係の観点から貿易を捉えるからです。バランスの取れたという意味は、EUと日本の企業がそれぞれの市場で直面する障害が本質的に異なる

るからです。「非関税障壁」のような専門的な問題について皆さんの前でお話しするつもりはありませんが、この点は考慮に入れるべきだと思います。関税を撤廃したことによる利益の恩恵は片方だけが受けるべきではありません。私たちには話し合う用意があります。そして私は、ともに良い結果に到達するであろうと確信しています。

それでは3つ目のポイント、お互いの社会的接点に話を移したいと思います。学生、ビジネスマン、旅行者に観光客：鍵となるのは考え方や物の見方の交流です。そしてこれこそが、まさに神戸大学ブリュッセルヨーロッパセンターの存在そのものなのです。

神戸大学にとってこのセンターが、2年前に北京に開設したセンターに次いで2番目の海外オフィスと知り、とても嬉しく思います。(北京はもちろん隣国の首都ですから、特別な位置を占めていることでしょう。)それゆえ、このブリュッセルセンターそのものが、ヨーロッパおよびヨーロッパの大学との間により強固な関係を築きたいという神戸大学の強い意思の表れと受け止めております。

ご存知のとおり、大学という制度はヨーロッパにおいて創出されました。ボローニャ、オックスフォード、ソルボンヌ、あるいはルーヴァンについて思い浮かべてみてください。これらの由緒ある大学の歴史は中世まで遡ることができます。それにもかかわらず、私たちヨーロッパ大陸中の大学は、技術革新の最先端にあって未来を志向する強力なグローバルプレーヤーなのです。

少し付け足しますと、私たち二つの社会が共有するものは、過去の経験や先人の知恵を現代の私たちの挑戦に結び付けることのできる類まれな才能であると私は確信しております。ヨーロッパでも日本でも、人々は過去を忘れてやみくもに未来に向かって今を生きているわけではありません。自信を持って前に進んでいくために、私たちは常に過去から未来への架け橋を築いています。このことが私たちの社会に精神的な安定を与え、私たちの中心にあるアイデンティティを失うことなく現代の世界が直面する多くの挑戦や未知の要素に対処する能力を与えているのです。それは、他の地域の人々にとっては羨望の的なのかもしれません。

EUは日本の教育研究における国際化への努力を歓迎しております。私は、日本が2020年までに30万人の日本人学生を海外に派遣し、30万人の外国人留学生を受け入れることを目指していると知って、大変感銘を受けました。現時点の数に比較するとかなり意欲的な目標ですね。あなたがたは間違いなくグローバルな才能を持つ人々、すなわち自ら物事を考え新しい展望をもたらすことのできる人々をますます惹き付けることでしょう。このことが社会に及ぼす影響は相当のものだと思います。

神戸大学は、このブリュッセルオフィスを開設することで、世界に開かれた大学であることをすでに明確に示しています。しかし、それだけではありません。昨年訪れることができたEUインスティテュート関西において神戸大学が果たしている役割によってもそれが示されています。

私たちEUは、教育研究の国際化において重要な役割を果たしてきました。まず、EU内部向けに、かの有名な「エラスムプログラム」を学生交換用に作りました。このプログラムによって、発足以来これまで200万人の学生がヨーロッパの他の国で学ぶことができるようになりました。最近では、国際的なモビリティを高めることを目的としたグローバルバージョンの「エラスムスムンドゥス」を推し進めてきました。

しかしながら、これまでのところ、エラスムスムンドゥスの恩恵を受けた日本人学生は極めて少数にとどまっています。手付かずの可能性がまだ残っています。私は、若い世代の人たちがその可能性を切り開いてくれることを切に願っております。

以上、EUと日本のあらゆる関係に活力を与える可能性について、政治的および経済的側面から、そして私たちの社会および大学という側面から私の考えを述べてまいりました。

この点について、私は神戸大学が行っている取組みに大変感謝しております。そしてこの会議のタイトルこそが将来の展望に満ち溢れていることを証明していると確信しています。今日がまさしく「日欧教育研究連携の新時代」の第一日目です。